

返事を出したけれど、あんな返事で良かったのだろうか。もっと伝えなければならないことがあったのではないだろうか。大人になった花陽が、ああいう文章を冒頭に書いたように、私自身も大人になっていたのだろう。知りたかったことはもっとあったはずなのに、私は全然書かなかった。

書くことを忘れたわけではなく、書けなかった。ペンを執ってみると、花陽が告白したように書きたいことは沢山あった。必要なことだけを書く論文とは違い、淡々と叩き続けるキーボードとは違う感覚。思考が言葉を先行し、書かないといけないという急かすようなことはなく、思考と言葉が同時に指先を突き抜ける不思議な感覚。

不思議な感覚に戸惑ったから、あんな手紙

になった。言葉を選ぶのと考えるのが重なった。

休みの日に忙しくて読めなかった郵便物を読むと、随分前に投函した手紙のことを思い出す。もう出したのにも拘らず、思い出す。どうして思い出すのか明らかにするため、ノートを買った。頭の中だけで解決するつもりだったのだけど、思案だけで終わってしまい、根本的解決にならないのではないかと思い、書き残すことにした。こうすれば手紙の時と同じような感覚になる。

このノートの中だけでは良い格好をせず、総合病院のお嬢様でもなく、優秀な医師でもなく、一人の女として向き合いたい。……可能であれば。

こういうことをするのは私のためじゃない。

かつて、とても大事な時と一緒に過ごした花陽のためだ。あの子が手紙を書いた。詳しくは書かれていなかったけど、私の所に手紙が届くということは容易ではなかっただろう。

大学は別だったし、留学のことも、就職のことも、こっちに来ることも言わなかった。過去を振り返りたくなかったから。戻れる可能性を見たくなかったから。慣れ親しんだ所に戻ってしまえば、私も同じようになってしまいそうだったから。

そういう決別をしたのにも拘らず、こうして再び、あの子のために手紙を書こうとしている。どうしてかは分からない。納得できるような理由を持ってくるとすれば、花陽の労力に応じようとしているだけ、きっとそう。

もし、私と花陽がただのクラスメイトなの

だったら、こうして再びペンを執ることはない。数多の郵便物と一緒に読んで、おしまい。

でも、あの手紙はそんなことができなかった。普通の手紙と違うから？ 差出人が花陽だから？ きっと、花陽だからだ。

友達という子を知ったのは中学の時だった。あの子とはもう会ってない。会おう会おうと思って、時だけが流れた。そういういずれ会えなくなるのが友達だと思っていた。

でも、高校に入ってできた子は違う。気が弱いけれど、自分の好きなことに一所懸命な女の子。同じ年の女の子なのに、昔の自分を見ているような懐かしさ。

テレビの中で歌って踊るアイドルが好きな子。別に歌って踊るアイドルに限定しないらしいんだけど、未だによく分からなかったけ

ど、熱弁する彼女の言葉を聞くと、好きなんだってよく分かった。自分の好きを真っ直ぐ伝える。

かつてのことを思い出すと、呼応するように色々な旋律が蘇る。ペンを執る手がリズムに乗る。鍵盤に触れることなく、論文を書いたり、研究や手術に費やされたこの指は、まだしっかりと記憶している。自分で作った曲を、皆と一緒に作った曲を、九人で歌ったメロディを、覚えている。

私も花陽も、スクールアイドルでなければ知り合えなかったことだろう。私から誰かに近づくようなことはないし、花陽から私の方へ近づくようなこともない。精々互いに、クラスメイトの一人、と思う程度だ。花陽がそんな人に手紙を書くなんてしない。

……いや、もしかすれば書くのかもしれない。アイドルと握手するような、ファンレターを送るような、そんな分かりやすい憧れを携えて。どちらであれ、自分より上の人間に向けて書く程度だ。自分と対等な人間に書くとは思えない、きっとあの子は恥ずかしくなった沢山の失敗作を量産して、結局出さない。

こうして自分自身のために書いている私と同じだ。

そんな花陽が、手紙を書いた。どうして、そんな当たり前のことに気が付くのにこんなに時間がかかったのだろう。どうして手紙を貰った時、気付けなかったのだろう。そうすれば、ちゃんと書けたのに。……ちゃんと？ちゃんと何なの。あの手紙はちゃんとしていなかったのだろうか？

あの時、私はあれがベストだと思った。急いで慌てて返事を書いたのは事実だけど、あの手紙も、ちゃんとした手紙だ。

文書の上だけだったけれど、再会の意味を噛み締める余裕があれば、もっと沢山のことを書けた。そこが分からなかったから、あの返事は今思うと、ちゃんとした返事じゃない。

花陽はあんな返事を求めていたのだろうか。一ヶ月近く待った手紙の返事が、あんな短いもの。何年振りの言葉なのに、素っ気ない。きっと、花陽の思っていた返事と違うはずだ。花陽は私の返事を見て、何を思うのだろうか。

あの子のことだから、きっと、返事を書いてくれて良かった、と思う。そう思っているであろうと私は信じている。でも、それだけないことは分かっている。

それ以上のことは分からない。花陽が、私が手紙を読み何を思ったのか分からないように。私達が唯一知れるのは、便箋の内に綴られた言葉だけだ。だから、私は私のためにも、花陽に新しく伝えるためにも書かないといけない。

雨の日に出掛けるのは嫌だったけど、仕事を終えてからだとどこもかしこも閉まっているので、動いた。返さないといけない連絡だけをして、返事に必要なものを買いに行った。同僚に教えてもらったそのお店は、沢山の紙が置いてあった。右には色取り取りの革が置いてあり、左には封筒とセットになった便箋が置いてある。

そういうお店を教えてほしかったわけじゃないけど……。無言で帰るわけにはいかず、



書き物をする店員さんに声をかけた。返事を書くので何か紙が欲しい、と。すると、店員さんは物の手を休め、「どれでも良いですよ」と一番困る返答をされた。それが分かれば苦労しない。言葉に窮していると続けて、「あなたが相手のことを思い、返事を書く。この時代に、ペンを執り、紙に書く。貴重な時間を割いて、そういうことをした。その気持ちは伝わります」と微笑を振りまく。

全く困った。何と理想的な答えだろうか。そう言われれば、何もいえない。そんなことはないと否定してしまえば、私はこれまでの私とこれからの私を否定するだけではなく、花陽すら否定してしまうことになる。私も花陽も、仕事を終えた時、休みの日の貴重な時間を、もっと他のことに使えたかもしれない時間を

割いて、たった一人の、どこで何をしているのかはつきりと分からない友達を思って、ペンを執り、ポストへ走った。

あんな限られたスペースでは自分の伝えたいことを正確に伝えることは全然できない。もっと沢山の言葉が必要だし、言葉以外のものを必要になってくる。身振りだとか手振りだとか、声の調子だとか……。それをたった一本のペンで正確に言葉にするなんて無理だ。

自分の気持ちと向き合っただけの確かな言葉を瞬時に選び抜けるような人間ではない。文章も音楽と同じように、沢山の時間を費やして物にした。身体に染み込ませるように繰り返し繰り返し、まるで自分の手足のように扱えるようにした。

だから、日本を離れることを許された。私

には最初から何もなく、特別与えられたものもない。何かを好きであり続ける強さも根気もない。嫌いはものも含めて、諦めないようにしてきただけだ。

諦めないように努めて、どうなるのか分からない。この大学から姿を消し、地元に戻ることも有り得るだろう。病院を継がず、院内での出来事を面白おかしく書いたエッセイ等々を書いて生活するかもしれないし、かつてのようにピアノの前に頭を垂れるかもしれない。

しかしそういう想像は永遠に想像の域を出ない。私はそういう道を歩まないように、高校の三年間で全ての感情を燃やし尽くした。そうして、日本を離れた。

だけど、染み付いた感覚は心身から離れな

かった。指が鍵盤を、喉が調子を記憶している。心が感情の乗せ方を知っている。テレビで流れる音楽を聞くと、指が勝手にリズムをとる。いつしか、部屋にピアノを置くようになった。

休みの日に郵便や連絡を終えると、何かするわけでもないのにピアノの前に座っている。そこが私の居場所であるように。真っ黒なピアノの前に座っている。蓋を開け、真っ白な鍵盤に映る楽しそうな私の顔を見て、一つ、また一つと音を奏でる。何か弾きたいわけでもない。指が勝手に動く。

子供の頃に聞いた曲、父や母が口ずさんでいた曲、コンクールで弾いた曲。中高の時に聞いた曲、作った曲。この前耳にしたストーリーミュージシャンの曲はこんな感じだった

だろうか……幼い時に戻ったかのように、日が暮れるまで弾く。

ピアノは全てを知っていた。初めて触れた喜び、発表会の緊張や不安、初めて友達の前で弾いた驚き、初めて友達が家に来た戸惑い、好きだった先輩との別れ、友達と曲を作った楽しさ、友達のために曲を作った意外さ。

ピアノは最早、過去の産物として捨てられるものではなく、血と同じように身体中を巡り巡っていた。

私も花陽も自分の思いを言葉にするのは得意な方ではないだろう。離れ離れになっている間に上手になったかもしれないけど、その実はあの頃と何も変わっていないことだろう。私は言葉よりも、言葉を書く手よりも、文章を読む目よりも、ずっとずっと耳を鍛えた。

音がとれるように、外さないように、合わせられるように、耳を傾けた。難しいところは付きっきりで向き合うこともあった。

学校だと恥ずかしい花陽のために家に呼んで教えることもあったし、花陽は私が言葉にするよりも先に音の微かな違いで何かを感じ取るようなことがあった。そういう時、花陽は私の手を止め、何かあったの？ と訊く。事実、何かあった私は、花陽にだけ教えたことは何度もある。

私達の間言葉は必要なのだろうか？ 長々と書かなければ伝わらないのだろうか？ 私達は最も大切な三年を共に過ごした友達なのではないだろうか。短くても、落ち着いて書けば伝わるのではないだろうか？ この感情の唸りも含めて、伝わっているのではない

だろうか。十年の時間が私達の間にあると  
……。

私はピアノを捨てずに海を渡った。だから、  
花陽の心に届く。私がピアノを弾いて、花陽  
が聞く。だから、大丈夫。

どんな曲を弾くかは決まっていない。五線  
譜に書き込みながら考えることもあれば、い  
たずらに弾くこともある。必要なのは、モチ  
ーフ。誰のために、どういう音を用意するの  
かということ。

花陽に烈しい調子は似合わない。かといっ  
て、物哀しいものも似合わない。いよいよ花  
が開かんとするその時、麗かな一刻。そうい  
う調べがあればいい。

ピアノに向かい、そういう音を探すように  
弾いてみるけれど、音は全然芽吹いてこない。

当たり前だ。弾くことはあっても、作ることは随分と久し振りだ。あの青々しい日々を思い出して作ってみようとするが、全然響いてこない。いくらピアノに慣れ親しんだ指であろうと、青々しい日々までを取り戻すことはできない。

となれば、今の指で弾くしかない。かつての音や音楽を取り戻そうとするのではなく、かつての花陽との日々を思い返そうとするのではなく、今できる旋律を弾く。込められる感情を込めて。青々しい技術と瑞々しい感性を失った今のピアノは下手だ。

それでも良い。上手いとか下手とか関係ない。この曲は、たった一人の友達のために弾くためだけなのだから。

ピアノを辞めていないこと。ピアノを辞め



ずに医者になったこと。

それを伝えたい。それだけは伝えたい。花陽がアイドルが好きなまま大人になったように、私も私の好きなものを捨てずに大人になった。

きっと花陽は私に手紙を書くことを恐れていたことだろう。私達の間にある思い出には絶えず音楽があった。異国の地で働き、どういう生活をしているのか分からない友達に、医者になるために好きだったピアノを諦めるように弾かなかった私に、どういう言葉をかけるべきなのか悩んだにちがいない。

元気になっている？ 調子はどう？ そういう何気ない言葉は、私が思っていることよりも辛かったはずだ。そこに至るまでの過程を知っているからこそ。

そして、その返事が一ヶ月近く空いてしまえば、手紙を送ったこと自体が間違いだと思ってしまうもおかしくない。あるいは、読まれなかったと思ったのかもしれない。

私がこうして書いているように、花陽も悩んでいることだろう。だから、伝えたい。変わっていないことを、この思いを、伝えたい。遅くなって、ごめんなさい、という言葉よりも先に。



